

平成 23 年（ワ）第 1291 号・平成 24 年（ワ）第 441 号・平成 25 年（ワ）第 516 号
伊方原発運転差止請求事件

意見陳述書

2014年3月11日

松山地方裁判所民事第2部 御中

アーサー・ビナード

この3月11日という日に、伊方原発運転差し止め訴訟の原告のひとりとして、意見陳述をいたします。

私は1967年にアメリカ合衆国のミシガン州に生まれました。海かと思いがうほど大きな湖に囲まれ、その五大湖で泳いだり魚釣りをしたり、水のありがたさを忘れるくらい水資源に恵まれた環境で暮らしていました。しかし中学生になって、私は故郷ミシガンの豊かな水がいかに危うい存在か知りました。実は自分が生まれる少し前の1966年に、エリー湖のほとりに建っていたエンリコ・フェルミ原子力発電所が重大事故を起こして、原子炉が破損しました。ただ、ぎりぎりのところで爆発を免れて、核物質の大部分は炉の中にとどまりましたので、エリー湖は放射能のスープにならずに済みました。奇跡が起こったといっても過言ではありません。

高校生のころから私は英語で詩のようなものを書き始め、大学に進んで英米文学を学びました。卒業論文をまとめる際、ひよんなことで日本語に出合い、魅了されて1990年来日しました。東京の日本語学校に入り、勉学にいそしみ、そのうち日本語でも詩を書き出して、絵本の創作も手がけるようになりました。そして2002年の春、再び故郷の湖を、危うく失うところでした。

エリー湖のほとりに建つもうひとつの原発、デービス・ベッセ原子力発電所が、制御不能に陥る一歩手前で止められ、奇跡的にメルトダウンが回避されました。圧力容器の異常に、作業員がたまたま気づいて制御棒が入り、そのおかげで故郷は強制避難区域にならずに、今も私は防護服無しでも帰ることができます。

2007年の夏には、新潟県で大地震が発生して、柏崎刈羽原子力発電所が事故を起こしました。けれど、原子炉の冷却が綱渡り状態で続けられ、最悪の事態を免れました。メルトダウンをきたさなかったのは、まさに奇跡でした。

2011年3月の今日、太平洋の底で巨大地震が起こり、岩手県、宮城県、福島県

の沿岸部を中心に、たくさんの人が津波にのみ込まれ、計り知れない命が失われました。そしてそのとき、福島第一原子力発電所では、奇跡は起こりませんでした。1号機と2号機と3号機がメルトダウンをきたし、爆発して、大量の放射性物質が陸に降り積もり、海に流れ出しました。起こるべくして起こった人災です。

それなのに、責任を取るべき立場にいる人物は口をそろえて「想定外」といいました。つまり「原子力の安全性」とは、運よく奇跡が起こることを前提に、天の助けを当て込んで組み立てられているものと、そういった実態が炙り出されたのです。

エリー湖のほitoriではなく、日本海のほitoriでもなく、瀬戸内海のほitoriでもなく、太平洋のほitoriでメルトダウンが起きました。この3年間、毎日欠かさず太平洋は大量の放射性物質をのまされてきました。2014年3月11日の今日も、松山地方裁判所で私たちが話しているあいだも、流出はずっと継続中です。

まったく終わりが見えないこの問題について、自分の日本語学習を振り返りながら、ここで考えてみたいと思います。

私が来日した当初の日本では、「ミネラルウォーター」というカタカナ語は、ほとんど流通していませんでした。蛇口をひねれば飲める水が出るというので、日本の多くの生活者は当然、水道水を飲んでいました。ところが、水が売り物に作り変えられる流れが次第に大きくなり、私は違和感を覚えつつも、さまざまな新商品のネーミングを観察し、やがてその広告の法則を割り出すことができました。

ゼロから組み立てられた日本語の技術ではありません。もともとベースになる日本語の単語がいくつかあって、「水道水」とか「地下水」、「飲用水」、「伏流水」も命名のテクニックの出発点と言えるでしょう。古くから使われていたそれらの言葉をふまえ、ボトリングして販売する水を、たとえば「自然水」と名づけてプロモーションします。または「天然水」と呼んでキャンペーンを張ります。もう少し高級感を醸し出そうとするなら「還元水」と命名してもいいし、もっと神秘的に消費をそそりたければ「深層水」という手もあります。H₂Oの中身はたいして変わらないはずですが、細かく呼び分けることで売り上げをのばせます。

その延長線上で、さらなる差別化をはかる戦略として、さまざまな地域のローカルカラーを前面に打ち出すようにもなりました。奥出雲へ行けば「龍神水」が店先に並び、屋久島へわたれば「縄文水」が売られ、東京では「東京水」のコマーシャルが流れて、まさに枚挙にいとまがありません。数々の実例から、日本語のテクニックは浮かび上がってきます。まず魅力的な漢字の2文字を選び、その尻に「水」の1字をつけ足して「すい」と読ませます。頭の2文字によって「〇〇水」のイメージが作られ、スペシャルなウォーターとして受け止められるわけです。

商品名の「自然水」も「天然水」も「還元水」も「深層水」も、いつしか一般名詞に見えるくらい定着して、私は日本語の水マーケティングはそろそろ飽和状態だなどと思っていました。けれど2011年3月11日のあと、「〇〇水」のこの定型はより一層巧妙に利用され、うんと手の込んだイメージ戦略へと深化しました。現在、いちばん効果をもたらしているのは、まぎれもなく「汚染水」というネーミング。

テレビでこれまで何回も大々的に取り上げられ、新聞でもいったい何回トップの一面をかざったことか。3文字の「汚染水」のみならず、派生語として「汚染水問題」「汚染水漏れ」「汚染水対策」「汚染水タンク」などなど、全国にこの呼び名を浸透させるキャンペーンは、あれよあれよと知名度を高めていきました。

日本の生活者の多くは、きっと「汚染水問題」をコマーシャルではなく、ニュースとしてとらえているでしょう。しかし冷静に見つめれば、広告代理店がひねり出した名称に違いありません。なにしろ本質を包み隠すように、最初から組み立てられているからです。

科学的には、とても「汚染水」と呼べるような可愛い次元の問題ではなく、核分裂の「死の灰」が大量に流出する危機が続いています。半減期29年のストロンチウム90だの、半減期30年のセシウム137だの、半減期24000年のプルトニウムだの、人工的に作られた殺傷能力の高い放射性物質が、圧力容器と格納容器を溶かし環境に出て、無差別に生き物を蝕んでいます。処理も処分もできず、出口戦略すら描けていないのが現状です。風が吹けば飛ばされるし、雨が降ればいっしょに流れるし、おまけに、冷やしておかなければ再び爆発するおそれがあるので、絶えず水を注ぎ込まなければなりません。当然、溶け落ちた物質が地下水に触れて拡がります。そんな深刻な人災を「汚染水」と軽く命名したのは、どうしてなのか？

ストロンチウム、セシウム、プルトニウムをはじめとする危険きわまりない放射性物質は、大気中に出ても土に付着しても海に流れてしまっても、とりかえしがつかないのです。その実態を矮小化して、ほんの一部だけ切り離し「汚染水問題」と名づけて、さも対処ができるみたいに「汚染水対策」を連呼することで、ごまかして時間が稼げるでしょう。

「炉心がぐちゃぐちゃに溶けて、圧力容器が無圧力の策と化し、格納容器も穴だらけの茶こし容器になり、近寄ることもできない放射性物質がごっそり出ちゃって手の施しようがなく、このダダ漏れ状態は止められず、手詰まりだ。現場作業員の被曝線を度外視しない限りは、ずるずるとごまかすのが関の山」と、もし政府が正直に認めた場合、原子力と核開発の利権構造は崩れてしまいかねません。原発海外輸出の商談はポシャるし、もちろん国内の再稼働、この愛媛の伊方原発の再稼働もできなくなります。ただでさえ回らない「燃料サイクル」も、原子力規制委員会の「安全審査」

も、噴飯ものと見抜かれてしまいます。

安倍総理大臣が去年「Under control」と言ったのは、隠蔽する日本語のトリックによって「世論がコントロール下にある」という意味だったのかと疑いたくなります。

「汚染水」をボトリングして販売する必要はありません。「汚染水」という日本語が流布するだけで、コマーシャルは大成功です。要するに、みんなが「水」の問題だと勘違いしていれば、ごまかすことができます。放射能のホの字、被曝のヒの字、ストロンチウムのスの字も表面に現れない「汚染水」のネーミングは、ミネラルウォーターの宣伝技術を転用した離れ業といえます。キャンペーン開始から一気に広まり、正式名称として使われ、「汚染水」を言いかえることは、もう無理なのでしょう。

いや、実態とつながるまともな呼び名を使わなければ、日本語という言語は劣化します。劣化した日本語に惑わされて、私たちの思考も鈍り、下手をすれば伊方原発の再稼働を許してしまう可能性があります。再稼働を許したら、遅かれ早かれ、メルトダウンが起こるべくして起こるかもしれません。伊方原発3号機がメルトダウンをきたしてしまったら、福島第一原発の3号機と同様に、おびただしい放射性物質を海に垂らすかもしれません。

そうなった場合は、「汚染水」と呼んでごまかすことは不可能です。なぜなら、世界一広い太平洋だからこそ、核分裂片がいくらか拡散されて薄まり、その結果、今のところ危機的状況を隠蔽できているのです。でも瀬戸内海という「うちうみ」に、同じものを漏らしたら、影響が如実に表れます。

この日本列島で繰り返されている現象を、太平洋の生き物の身になって日本語で正しく名づければ「海ころし」となるのです。「汚染水」ではありません。福島の浜通りで、今この瞬間も残酷な「海ころし」が続いています。それを見て見ぬふりをして、伊方原発の再稼働を認めたら、私たちは瀬戸内海をころす犯人になりかねません。3月11日に、愛媛の「うちうみ」のほとりに立てば、選ぶべき道は見えるはずで